

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年1月1日発行
（毎月1回1日発行）
第15巻第1号 通巻163号

1

月号

2020



記

鴨の来て鳩来て神の戻り来て

志賀直哉旧居蓑虫ずぶ濡れに

たつぷりと濡れて南蛮煙管かな

別々に座し水鳥に目を凝らす

マロニエ通り先駈けの冬がくる

鴨の陣崩れてはまた鴨の陣

晩秋の蝶よお前も白樺派

冬迎ふなんじやもんじやの樹の下で

日の短経木に包む山のもの

雨よ雨まつこと赫き鷹の爪

露しとどなり一木に一草に

河原撫子座りごこちのよきベンチ

源義忌鴻司忌秋の澄むことよ

鴨の陣

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

読み返すリルケの詩集そぞろ寒

美濃律子

蛇笏忌の一村深き霧の中

相川 健

鉛筆で家計簿たたく星月夜

中川幸恵

とんぼとんぼ枯山水のある茶室

伊藤真代

十三夜為書のある豆色紙

北村 操

近江八幡暮れ櫂の音と鴨の声

中内敏夫

ときをりの瀬音が秋の声となる

佐藤あさ子

取り混ぜて買ふ秋の花秋の草

黒川みつ恵

谷中銀座の薬膳カレー暮の秋

後藤秋沙

誰か呼ぼうかふかふかの蒸し諸

小林和子

鳳仙花嬰にも小さき反抗期

高笠栄子

水澄むや白磁の壺の肌触り

青木まゆみ

しろがねの花のすすきとなる夕べ

荒井一代

穴惑ひ周辺地図の現在地

三代川朋子

南蛮ぎせる墨東の刻ゆるやかに

田邑利宏

林中に踏む音はみな秋の音

北原沙織

こそぎたる牛蒡ひらひら宵月夜

水谷はや子

ベレー帽少し斜めに木槿の忌

水沢和世

旧盆の路面電車が石畳

石島かず

威勢よき女将はおごじよ秋の宵

北城美佐



草木萌動（そうもくぼうどうす）
草や木々が芽を出し始めること。「礼記」より。

★亀戸書会のお知らせ

- ・1月18日土曜13時30分～16時30分
- ・江東区文化センター [江東区東陽町4-11-3] /美術室

※地下鉄東陽町より歩いて5分です。

※場所はいつもと異なりなりますが、ぜひお越しになってください(^^)

(〒454-0962 名古屋市中川区戸田1-3026-103/伊藤 隆 TEL090-8959-6572)



羽音集

増成栗人 選



類杖をつき窓越しの居待月 会津 中川 幸恵
 鉛筆で家計簿たたく星月夜
 新しき靴弾ませて大花野
 鈴虫の鳴くたび母を思ひ出す
 うろこ雲明日は遠出と決めてをり 土浦 小林 和子
 田を埋めるごとこれほどの曼珠沙華
 児の丈にかがみて付ける赤い羽根
 城址へ路地ふた曲り花芙蓉
 誰か呼ばうかふかふかの蒸し諸
 木洩れ日と溪流の音秋澄めり 松戸 山岸 明子
 櫛の森色なき風を纏ひたり
 岳樺 黄葉どきの沼に雨
 立ち枯れの椴松よ見よ秋の空
 爽籟の白神の森ほの暗し
 萩すすき五重塔の黄金色 船橋 藤原 明美
 女郎花寺には寺の秘史のあり
 月山に槍千本の鶏頭花
 秋澄むや双眼鏡で鳶を追ふ
 大花野過去は縮図のやうにかな

「鴻」の歳時記

(冬・新年編)

抽出

佐久間敏高

見出し季語の順位は「角川大歳時記」に寄っています。

冬 水平線 確と円しよ 冬岬

小澤 冗

立冬 観音の指やはらかく冬に入る

森 祐司

寒し 若冲の鶏冠の赤にある寒気

佐野久乃

日脚伸ぶ 空箱の中に空箱 日脚伸ぶ

半谷洋子

冬日 蠟螂の骸に冬日とどきけり

横尾かな

冬の月 たましひの色かも知れぬ冬の月

石田蓉子

冬銀河 冬銀河ギリシャ神話を散りばめし

山内宏子

山眠る 酔ふほどに眠れる山の遠くなる

ありかわみのる

枯野 枯野道ゆく上弦の月の白

原 達郎

冬の泉 死とは何冬の泉のこんこんと

増成栗人

凍 滝 冬の瀧濡るるを忘れぬたりけり

吉田鴻司

着ぶくれ 着ぶくれて座す居酒屋の隅の席

石垣真理子

セーター 黒セーターの昨日とちがふ黒であり

岩佐 梢

マスク マスクして寺の書展のトンパ文字

中村世都

冬の鴉 妻癒えよ癒えよと冬の鴉の声
 綿虫 綿虫のふはと寺への道しるべ
 冬薔薇 冬薔薇崩れるときの赤さかな
 朴落葉 朴落葉踏みしめひとの言葉欲し
 裸木 裸木となりて貫録生まれけり
 正月 正月の凧鳩のやう蝶のやう
 女正月 ぎんなんを熔烙で炒る女正月
 恵方 恵方とはかりがねの列渡る道渡る道

荒川心星

伊藤 隆

水沢和世

森 睡花

守屋吉郎

足立枝里

西野桂子

倉林はるこ

ちよこせつせつまで

第8回



「品川・旧東海道を歩く①」

鈴木 崇

旧東海道の品川宿を歩く。巨大ターミナル駅の品川駅から京浜急行の普通列車で一駅の場所にあるにもかかわらず、訪れる人は少ない。むしろ一駅分の距離が心理的な遠さとなるのか。

京急北品川駅を降り海側に向かって歩くと、船溜まりに突き当たる。海に向かうゆるい下り坂になっているところに、かつての地形を残している。屋台船や釣り船が停泊する先に高層ビル群が見える。各駅停車の「世界とターミナルの世界のコントラスト。しばらくたたずんでいると、戻ってきた釣り船から手を振っている。

旧東海道沿いの旅籠屋「相模屋」跡が一階にコンビニエンスストアが入るマンションとなっている。かつては道の両側に旅籠屋や茶屋が軒を並べ、街道最初の宿場町としてにぎわった。また、品川は吉原に次ぐ遊里でもあり、吉原が江戸城の北の方角にあり「北」と呼ばれたのに対し、品川は南の方角で「南」と呼ばれた。落語の演目「品川心中」「居直

り佐平次」が品川遊廓を舞台とした落語で有名だ。

「吉原アもう遊び飽きちまったから、今夜は南のほうへ押し出そうつてんだが、どうだよ。エエ、あそこは海が近えだろ、食い物やなんかうめえんだよ、行こ行こ。なんてものである。

利田神社境内に鯨塚がある。寛政十年、品川沖に現れた大鯨を捕獲し、江戸中の評判となったそうだ。「寛政の鯨」は「享保の象」「文政の駱駝」とともに江戸を驚かせた三大動物と呼ばれている。鯨塚はその骨を埋めた上に建てられた供養碑なのだ。

江戸に鳴る眞加やたかしなつ鯨

谷素外

碑の正面には談林派七世の句が刻まれている。

旧東海道沿いは昔ながらの商店街の雰囲気の流れれており、往時を偲ぶとまではいかないが、歩いていて楽しい。下駄屋のディスプレイに黒塗りの高下駄があったりして、「南



品川・船溜まり

の花魁の姿を想像する。

神社仏閣が多く点在し、東海七福神を巡ることもできる。境内裏手が入り組んだ路地となつているところもあり、歩道の真ん中に現役のパンプ式井戸があったりして、町歩きにもってこいだ。黒湯が沸き出る銭湯もある。

大黒天の石像が迎える品川神社は京急沿いの高台にある。京急に乗っていて車窓から見ると品川着の目印となる。境内には富士塚があり、富士参りを疑似体験できる。旅人の見送りや江戸市中からの遊山客が訪れアトラクションとして楽しまれたのだろう。山頂からは品川沖が一望……かつてはできたはずだが、現在は、埋立てで沖は遠ざかり、ビルやマンションに視界を遮られ、眼前を走る列車が通り過ぎていくのをただ眺めるばかりだ。

茶庵閑話

第 9 回



先生
兼題と
原題とは
よく似た
言葉なんです
がどう違うん
でしょう



投句する句の季語やキー
ワードをあらかじめ決めて行
うのが兼題句会
その場で題を決めて即興で
作句するのが原題だよ



題なんかは
決めずに
めいめいが
作ってきた句を
出すのが雑詠句会
だが季語だけは
今現在の季節でという
ことで
当季と頭に
つけるんだ

なる
ほどー



二ユース
でも
日本は
トーキョウ家
になったと
言っていました

それは
投句だよー